

## 量・関係・性質

——アリストテレス『範疇論』の場合——

田 畑 博 敏

(平成5年6月21日受理)

### はじめに

アリストテレス『範疇論』における「実体論」については、本誌に発表した拙論ですでに論じている<sup>(1)</sup>。小論はその続編であり、実体以外のカテゴリー、とくに『範疇論』で比較的詳しく扱われている「量」「関係」「性質」を、アリストテレスのテキストに即してこの順に考察していく。アリストテレスにとって、これらのカテゴリーは個々の事物のあり方を問う問いの立て方に対応していた。しかし、無論、事物のあり方をどのように分類するかということは、「問いの形式」という言語的枠組みだけで片づく問題ではなく、事物そのものへのアプローチが前提されている。「2尺」という規定は、「2倍」という規定とどう異なるか？ 2尺という量はある事物が単独で持ちうる規定であるのに対して、2倍という規定はある事物が他と比較されて初めて持ちうる規定である。知識の所有と子供を持つ（子供を生む）こととはタイプを異にする規定である。ある知識（例えば文法の知識）を身につけることにより「知識を持つ人」と呼ばれ、またその点で「知者である」とも呼ばれる。しかし、子供は知識と同じ意味で所有することや身につけることはできない。確かに、子供ができて「親」と呼ばれるが、それは常に子供との対応において初めて語られることである。逆に子供も親と呼ばれる人に対応して初めて子供である。しかし、知識はこれとは異なる。子供は親の存在を抜きにしてはありえないのに対して、知識はその所有者から独立しており、また子供には特定の親しか存在しないのに対して、知識の所有者は無数にありうる。アリストテレスにとって知識を持つことは性質の一つであり、親であること（および子供であること）は関係であり、これらは異なるカテゴリーとされる。カテゴリーの分類は、「問いの形式」という言語表現上の機構を手掛かりになされるが、その基盤となるのは事物そのものの在り方であり、加えて反対性の有無、程度の差の有無等といったカテゴリー全体を測る標識によっても吟味されていくのである。それでは、「量」のカテゴリーから順次検討していこう。

## §1 量

『範疇論』6章で、アリストテレスは「量」について論じている。内容を細かく検討するに先立って、全般的な観点から、ここでのアリストテレスの「量」論の取り扱い方を見てみよう。アクリルも指摘するように<sup>(2)</sup>、第一に「量」を表現する術語として対応する抽象名詞(ποσότης)を用いることなく、疑問形容詞(πόσος, -η, -ον)に由来し指示形容詞として流用される語(ποσός, -ή, -όν)の中性単数形(ποσόν)を用いている点が注目される。これは、「どれほどの」という量を問う疑問への答えという形で「量」のカテゴリーを考えていく、というアリストテレスの探求スタイルから自然に出くさるものと言える。しかしまた、第二に、量的述語そのものを記載・分類するのではなく、量的特性を所有する(あるいは量的規定を帯びた)事物を記載・分類するという方法を採用している。量的特性の代表的所有物として挙げられているのは、数(ἀριθμός)・言葉(λόγος)・線(γραμμή)・面(ἐπιφάνεια)・立体(σῶμα)・時間(χρόνος)・場所(τόπος)の七つである。するとここで、つぎのような疑問が生じよう<sup>(3)</sup>。[1]なぜアリストテレスはこのようなやり方で探究したのか? [2]アリストテレスの分析方法は十分なものであるのか?

まず、問い[1]に対する解答としては次のことが考えられる。さまざまの量的述語に対応するだけ多くの量に関する抽象名詞がギリシア語にはないゆえに、量的特性を所有する事物によって量的特性そのものを代用させざるを得ない、ということ。また、量を表す言葉の多くが量的特性の所有物という意味を担うと同時に、抽象的な量的特性そのものをも意味し得るという両義性を持つ——例えば、単位の集合としての「数」は多さ(多数性)という量的特性の所有物であるとともに「限られた多さ」として抽象的な量の一つとされることがあり、同様に「線」も長さという量的特性の所有物と見られると同時に「限られた長さ」として量の一つとも見られることがある<sup>(4)</sup>——ということである。

より厳しい問いかけは[2]のそれである。探究の方法の十全性については、アクリルによれば、一定の条件の下では、量的特性の所有物のリストがそのままで量的特性そのものの網羅的かつ相互排反的分类となる、という<sup>(5)</sup>。しかし、問題は「一定の条件」である。アクリルはこの条件を、①そのリストが量的特性のすべてのタイプに対してただ一つの(派生的でない)所有物を含み、さらに②記載された各種の所有物がただ一つのタイプの量的特性のみを許容すること、と分析する。①の条件は、量的特性の網羅性と所有物の唯一代表性ということ、すなわち、量的特性が一つの遺漏もなくすべて完備されているようにその特性の所有物が記載されており、しかも一つの量的特性にはただ一つの代表的所有物が対応する(一特性に一代表)ということを要求する。②の条件は、量的特性の代表となる所有物はただ一つの量的特性のみを代表すること、つまり二つ以上の量的特性を重複して代表することがないこと(一代表に一特性)、を要求する。このうち、第二の条件②は比較

的容易に満たされる。(幾何学的)線は長さ以外の量的特性は所有しないであろうし、単位の集まりとしての数は多数性という量的特性のみを代表するだろう。ユークリッドは「線は幅のない長さである」として線を定義し<sup>(6)</sup>、アリストテレス自身も上述のように「限られた多さ」としての数、「限られた長さ」としての線について語るとともに、「限られた広さ」としての面、「限られた深さ[嵩]」としての立体について語っている<sup>(7)</sup>。要するに、数、線、面、立体には、それぞれ多さ(多数性)、長さ、広さ、深さ(嵩があること)というそれらが代表するただ一つの量的特性が対応している。ところが、①の条件はむずかしい。量的特性を網羅できたとしても、各特性を代表するただ一つの所有物を決定することは必ずしもできない。例えば、重さや強さ(仮にこれらを量的特性だとして)を代表するこれらの特性の所有物を一つ決定することは困難であろう。さらに、量的特性を網羅することも、量ということの範囲がいま一つ明確でないゆえに容易ではない。数えたり測ったりして「どれほどの」という問いが發せられたとき、その答えとなるものがアリストテレスにとっては量であると一応は言える。しかし、それ以上には、少なくとも『範疇論』においては、量の定義、判定基準を彼は展開させてはいない<sup>(8)</sup>。

さて、これから『範疇論』のテキストに沿ってアリストテレスの「量」論を追跡する。

#### (1) 不連続量と連続量

まずアリストテレスは、量を不連続量(*ποσὸν διωρισμένον*)と連続量(*ποσὸν συνεχές*)とに分ける(4b20)。ここでの連続と不連続の分類基準は、「その部分が共通の境界(*κοινὸς ὅρος*)に接触するか否か」ということである。不連続量の代表は数と言葉である。数(*ἀριθμός*)が不連続量である理由は、数の諸部分が共通な境界で接触することはないこと、とされる。数の部分と部分が接触し合う共通の境界を数の中に見出すことはできない。5と5は数10の二つの部分であるが、それらはどこか共通な境界で接触しているのではなく、分離されているのである。3と7も共通な境界に接触しているのではなく、10の部分として分離されている。数の諸部分は分離された仕方一つの数を作っている。それゆえ、数是不連続な量である。言葉(*λόγος*)も量とされるのは一見奇異な感じがする。この場合の言葉とは、書かれたものではなく音声を伴う話された言葉である。話された言葉は長短の音節で測られるから量の一種とされる。つまり、言葉の素材である音声が個々に分離された音節から成り、それが量的に測られる、というその点からすれば、付帶的・派生的な意味で量である。これが不連続量であるのは、言葉の部分である各音節が共通な境界に接触することがなく、一つ一つ分離されているからである。

連続量としては、線(*γραμμή*)、面(*ἐπιφάνεια*)、立体(*σῶμα*)がある。それらには諸部分が接触する共通の境界があるからである。線は点(*στίγμα*)を共通な境界としてそれに接触する。面の場合の共通境界は線であり、立体の場合のそれは線と面である。さらに、時間(*χρόνος*)と場所(*τόπος*)も連続量である。時間は現在という時間瞬間(*ὁ νῦν χρόνος*)で過去と未来の両方に接

触している。現在は過去と未来の共通な境界であるが、点が線の部分でないように、過去と未来のいずれの部分でもない。過去と未来という時間の部分は現在という共通境界で接触すると同時にそこで分割される。場所が連続であるのは、そこを占める立体が連続であることに起因する。立体の諸部分は共通な境界に接触しながら場所を占める。それゆえ、場所の諸部分も共通な境界に接触していなければならない、それによって連続量でなければならない。

#### (2) 相互に位置を持つ部分から成る量と位置を持たない部分からなる量

連続・不連続という量の分類に続いて論じられるのは、「相互に位置を持つ部分から成る量」と「位置を持たない部分から成る量」という区分である。アクリルによれば、量はその部分において相対的な位置を持つためには、①各部分が空間的な位置を持つ（「どこかに在る」*κεῖται* *πov* : 5a18）ということ、および②各部分が分離されておらず他の部分と接触していることが必要である、という形に整理できる<sup>(9)</sup>。すると、②の要求により、不連続な量は相互に位置を持つ部分から成ることはできなくなる。そして、①の要求によって時間が排除される<sup>(10)</sup>。こうして、「位置を持たない部分からなる量」には数と言葉と時間が属する。線、面、立体、場所はいずれも①、②の要求を満たすから、「相互に位置を持つ部分から成る量」に分類される。アリストテレス自身の説明はこうである。線、面、立体、場所の部分については、各部分はどこかに位置しており、かつ他の部分とどういう位置関係にあるかを説明できる、という。それに対して、数の場合には、その部分がどこに位置するかを認知できない。また、時間の部分は常に動いており止まることがないから、どこに位置するか言えない。言葉も話されたが最後どこかに止まることがないから位置を持ち得ない。ただし、時間や数の部分にはある「順序」（*τάξις*）があることは確かである。過去は現在より先にあり、未来は現在より後にある。1は2より、2は3より先にある。しかし、それらの相対的関連は位置のそれではない。

#### (3) 付带的に量と語られるもの

以上で語られたものが基本的に（厳密に *κυρίως*）量と呼ばれるものであるが、付带的・派生的に（*κατὰ συμβεβηκόσ*）量とされる場合がある。アリストテレスの挙げる例は、「白いものが大きい」「ある行為が長い」「ある運動が多い」と語られる場合である。「白いものが大きい」（*πολὺ τὸ λευκόν* : 5b1）と語られるのは、たまたま白くある平面が大きいことによるからだ、という。また、（それに要する）時間が長いことによって「ある行為が長い」と語られる（…, *καὶ ἡ πράξις μακρὰ τῷ γε τὸν χρόνον πολὺν εἶναι* : 5b2-3）。「ある運動が大きい」（*ἡ κίνησις πολλή* : 5b3）の場合も同様である。アクリルは、アリストテレスのこのような叙述を「教条的」（dogmatic）と評し、厳密な（自体的）量と派生的（付带的）量の区別が、数え上げや測定に関する基本的過程と派生的過程の区別の萌芽を含み得たにも拘わらず、アリストテレスがこれ以上に発展させていないことを遺憾なこととしている<sup>(11)</sup>。アクリル自身も、数え上げや測定の基本的過程と派生的過程の区別という

ものの具体的な提案をしていない（例えば、集合の要素の間で単に一对一に対応させることと、要素間の構造・秩序を保存する形で対応させることとの区別といったことが考えられようか）が、この箇所（5a38-5b11）アリストテレスが自体的・付帯的、厳密・派生という分類（これはアリストテレスの常套手段の一つである）だけでこと足りるとしている、という印象があることも否めない。アリストテレスとしては、自体的・付帯的の区別は別にここで事新しく始めた訳でもなく、ともかく、そのような仕方（「現に語られている」）ことの解明と記録を行っているにすぎない、ということになる。

#### （4）量には反対性がないこと

さて次に、アリストテレスは量には反対性がないことを論じる（5b11-6a11）。これまでアリストテレスは量的特性の所有物の考察を通じて、量そのものを論じていたが、これからは直接に量そのもの、量的特性そのものを取り使う。彼は（単に「線」としてではなく）確定した量そのものとしての長さ、例えば2尺、3尺には反対性がないという。ある限られた広さとしての面（「面」という語は誤解されやすい、とアクリルは言う<sup>(12)</sup>）にも反対性はない。ところで、ここで問題になるのは、「多」は「少」に、「大」は「小」に反対だといえないか、ということである。アリストテレスはそれらは量ではなくて関係である、と答えることによってひとまず切り抜けようとする。彼はつぎのように説明する。山が小さいと言われ、粟粒が大きいと言われることがあるが、それらは量的に規定されたのではない。山が小さいのは別の山との関係によって小さいのであり、粟粒も同類の粟と比較してそれとの関係で大きいのであって、それらが量的特性としての「小」と「大」を持っているのではない。他との関係なしにそれだけで山が小さいとか粟粒が大きいと言われることはない。この村落に人が「多く」、それより数倍も大勢の人間がいるアテナイに人が「少ない」と言われることがあるのも、同様の事情による。この説明は常識的ではあるが、一応理解しうるものである。

つぎにアリストテレスは、仮に大・小や多・少が量であるとしてもしなくても、それらに反対性はないことを、それらが関係であることから直ちに導こうとする（5b30-33）が、関係は反対性を一切拒否するものでないことは、以下に考察する7章での「関係」の説明からも明らかである。従って、大・小という関係がどういう理由で反対性を持たないか説明すべきであるが、それについては不明確なままで残している。

さらにアリストテレスは、大・小や多・少が反対性を持つと仮定したときにある不合理が生ずるとして、一種の帰謬法によって、それらが反対性を持たないことを論証しようとする（5b33以下）。

【論証1】：大と小が反対ならば、同一事物が、互いに反対のものを、同時に受け入れることになる。

この論証をアリストテレスはつぎのように進める。ある事物は一方に対しては小さいが他方に対しては大きい。例えば2は3に対しては小さいが1に対しては大きい。すると、同一事物が、同時

に大きくかつ小さいのだから、同一事物が同時に反対のものを受け入れることになる。しかし、「同一事物が同時に反対のものを受け入れる」ということは決してない。例えば、人は病気であり同時に健康であるということではなく、白くかつ同時に黒いということとはありえないからである。

しかし、この論証には不十分な点がある。大と小が反対であることから帰結するとするその不合理が、論理的に矛盾するかどうか疑問が残る。大と小が関係であるということは、論証の前提として明示されてはいないが、これまでの論述からすれば、そのように仮定してよからう。すると、大と小という関係が「反対である」という場合の「反対性」とは、「同一事物が同時に同一の観点から同一の事物に対して反対のものを受け入れる」<sup>(13)</sup>ことが無い、ということではなからうか？ 実際、2は3に対して同時に多さという観点から小さくかつ大きいということは不可能であるが、2が3に対しては小さいが1に対しては大きいということは、アリストテレス自身も認めているように、現にあることである。従って、アリストテレスのこの論証は、大・小が関係であることを強いて無視するか、または関係に関する反対性が禁じる不合理を強いて単純化することによって、達しうる厳密さから後退した疑似論証だ、と言われても弁解しがたいものとなっている。

【論証2】：大と小が反対ならば、事物が自分自身に反対であることが帰結する。

この論証をアリストテレスはこう進める。もし大と小が互いに反対であり、同一事物が大でありかつ小であれば、その事物は自分自身に反対であることになる。しかし、事物が自分自身に反対であることは不可能である。従って、(帰謬法により) 大と小は反対ではない。

この論証も妥当性が問題になりうる。事物が自分自身と反対であるという帰結が不可能であることは認めるとしよう。それでも、この論証は「特性AとBが反対であり、事物aとbがそれぞれ特性A、Bを持てば、aとbは反対である」ということを前提して、それからaとbが同一事物である( $a=b$ )とき、自分自身と反対になるという不可能を導いているようであるが、この前提自身が正しい原理であるのかどうか、判然としない。アクリルは、仮定から帰結する不可能(不合理)としては、事物が自分自身と反対になるということではなくて、二つの反対特性が同一となるということではないか、としてこの論証を再構成している<sup>(14)</sup>。

【アクリルによる論証2の再構成】

1. 大と小は反対である (6a5)；
2. ある事物は同時に大きく、かつ小さい (6a6)；
3. 反対であるものは同一の類に属する (6a17)；
4. 大と小は同一類に属する (1と3より)；
5. いかなるものも同時に同一類から異なる特性を受け入れることはない (反対性の受け入れ可能性についての一般的法則)；
6. 大と小は同一である (2, 4, 5より。すなわち、大と小が異なるとすると、2と4より

ある事物は同一類より異なる特性を同時に受け入れることになり、5に矛盾する。(ゆえに大と小は同一である。);

7. 同一の反対物がありうる (1と6より);

ここで、7は不合理である。ところが7は1, 2, 3, 5に依存して導出されている。ところが、2, 3, 5は正しいから、1すなわち、「大と小が反対である」が偽でなければならない。

#### (5) 程度の差と等・不等

量には反対性がないと同様に、「より多くより少なくということ」(*τὸ μᾶλλον καὶ τὸ ἧττον*), すなわち「程度の差」というものが量にはない、とアリストテレスは論じる。例えば、一方のものが他方のものより一層「二尺」である、とはいえない。また、3が5より一層3であるとか、ある3が他の3より一層3であるということもいえない。ある時間(間隔)が他の時間(間隔)より多く時間である、ともいえない。ただし、ここで大切なことは、量的特性ないし量そのものについての程度の差を否定しているのであって、量的特性の所有物(線、面等)に対してではない、とアクリルは注意している<sup>(15)</sup>。アリストテレスは「一つの線が他の線より一層線であるのではない」と言いたいのではなく、「ある線が他の線より一層二尺であるわけではない」と言いたいのだ、という。「ある時間は他の時間より一層時間であるとも語られない」(*οἶδ' ἔτι γε ὁ χρόνος ἕτερος ἑτέρου μᾶλλον χρόνος λέγεται*: 6a22-23) というアリストテレスの言い方は不正確であり、例えば「ある時間または時間間隔は他より一層〈一年間〉であるわけではない」と言うべきである、という。いずれにせよ、程度の差を受け入れることのある「性質」と受け入れない「量」との対比は、アリストテレスのカテゴリー論の特徴的論点の一つである。

6章の最後のパラグラフ(6a26-35)でアリストテレスは、量にとりわけ固有なこと(*ἴδιον*)として、「等しい・等しくない」(*ἴσον τε καὶ ἄμισον*: 6a26)ということが語られることである、と論じる。例えば、立体や数や時間は等しいとか等しくないと語られる。それに対して、状態、あるいは白さのような性質は似ているとか似ていないとしか語られない。この例からも分かるように、ここでは量的特性の所有物が考えられている。(『形而上学』1021a11での「それらの実体の一つであるものは〈同じ〉である[と語られ]、それらの性質の一つであるものは〈似ている〉[と語られ]、それらの量が一つであるものは〈等しい〉[と語られる]。』という叙述<sup>(16)</sup>と比較すれば、ここでのアリストテレスの意図がより明確になる。)

## §2 関係

『範疇論』7章で、アリストテレスは「関係」のカテゴリーについて論じる。彼は「関係」そのものを表現するギリシア語の名詞を持たない。そこで、「何かに対して」という意味のプロス・ティ

(*πρὸς τι*)という前置詞句を代用する。例によって、彼は「関係」そのものを言わば抽象的に扱うのではなく、関係づけられるものを表現する言語表現を手掛かりにして、「関係」そのものの構造に接近する、というやり方をとる。

#### (1) 言語表現を手掛かりとしての「関係」の定義と実例

アリストテレスは「関係」を定義するに当たって、関係づけられるものの言語表現（「関係項」と呼ぶ）に見られる特徴を出発点とする。関係項Aが関係項Bに対して、「BのA」「Bに対してのA」というかたちで表現されることが、AとBが関係づけられていることの言語表現上のメルクマールである。「Bの」というギリシア語は名詞Bの属格形であり、「Bに対しての」というギリシア語は前置詞 *πρὸς* に名詞Bの対格形が連なった前置詞句である。この言語表現により、事柄そのものの相互依存性、つまり関係性というものの構造の探求に手掛かりが与えられる。例えば、より大きいものは「何かより大きい」(*τινὸς μείζον* : 6a38-9)のであり、2倍のものは「何かの2倍である」(*τινὸς διπλάσιον* : 6b1)。「何かより」「何かの」という関係の対応物はともに属格で表現される。また、山は別の山に対して大きいと語られ (*ὄρος μέγα λέγεται πρὸς ἕτερον* : 6b8), 似たものはあるものに対して似ていると語られる (*τὸ ὅμοιον τινὶ ὅμοιον λέγεται* : 6b9-10)。

だが、同時にアリストテレスは関係的なものとして、状態 (*ἔξις*), 様態 (*διάθεσις*), 感覚 (*αἴσθησις*), 知識 (*ἐπιστήμη*), 状況性 (*θεσις*) を挙げている (6b2-3)。その理由は、状態は何かの状態として語られ、知識は何かの知識として語られ、状況性は何かの状況性として語られることだ、という (6b4-6)。これは一見奇異な感じを受ける。「関係」というものを余りに広げることになるのではないか、と疑われる。アクリルもこう論じている。——状態は必ず誰かのまたは何かの状態である、ということがアリストテレスの意図のすべてならば、すべての非実体語が関係語となろう。なぜなら、非実体は実体「においてある」からである。アリストテレスの意図は、おそらく状態は寛大さの状態、勇敢さの状態、知識は文法の知識、数の知識であるということだろう。しかし、ある語が属格を要求することではなく関係というもののあり方が問題だとすると、状態や知識はある特定の状態、特定の知識でなければならないということになる。しかし、類的なものが種的なものによって限定されることを要求することは、関係のカテゴリーに固有なこととは思えない、と<sup>(17)</sup>。——当該箇所 (6b2-6) から、この点についてのアリストテレスの真意を探ることは難しいように思われる。

#### (2) 反対性と程度の差

次にアリストテレスは、「関係」における反対性と程度の差について簡単に触れている (6b15-27)。反対性は、これを受け入れる関係的なものとそうでないものがある。何かに関係づけられているものとしての徳性と悪徳、知識と無知は互いに反対である。しかし、2倍のもの、3倍のものには反対のものはない。同様に、「より多くより少なく」(*μᾶλλον καὶ ἥττον*) という程度の差を受け入



れるものとそうでないものがある。類似性や等・不等は反対性を受け入れる。なぜなら、何かに一層似ているとか、何かに一層等しくないと言られるからである。しかし、2倍のものはより多く2倍であるとかより少なく2倍である、とは語られない。

### (3) 可逆性

次に取り上げられる関係の特性は「可逆性」、すなわち、関係的なものが対応物と交換して語られることである。例えば、「奴隷は主人の奴隷であると語られる」(*ὁ δούλος δεσπότου λέγεται δούλος*: 6b29) が、ここで「奴隷」と「主人」を交換して「主人は奴隷の主人である」(*ὁ δεσπότης δούλου δεσπότης*: 6b29-30) と語られる。同様に、「2倍であるもの」(*τὸ διπλάσιον*) と「半分であるもの」(*τὸ ἥμισυ*) についても、「2倍であるものは半分であるものの2倍である」と語られると同時に、関係項を交換することにより、「半分であるものは2倍であるものの半分である」とも語られる。「より大きなもの」(*τὸ μείζον*) と「より小さいもの」(*τὸ ἐλάττον*) についても、同様な可逆性(交換可能性)が成り立つ。これらの場合、主格で表現される関係項Aが属格で表現される関係項Bと交換されるとき、Bが主格、Aが属格になる。場合によっては、語り方の相違で語尾変化も違って来る。〈主格A: 属格B〉が、交換の後、〈主格B: 与格A〉となることがある。例えば、「知識は知られうるものの知識である」(*ἡ ἐπιστήμη ἐπιστητοῦ ἐπιστήμη*: 6b34) と語られるが、交換の後、「知られうるものは知識にとって知られうるものである」(*τὸ ἐπιστητὸν ἐπιστήμη ἐπιστητόν*: 6b34-35) と語られる。「感覚」(*αἴσθησις*) と「感覚されるもの」(*αἰσθητόν*) の対についても同様のことが言える。事実上、ここでアリストテレスは逆関係のことを考えている。現代流の捉え方では、関係Rと関係Sが逆関係であるのは、任意の項x, yについて、RxyとSyxが同値であるとき、そのときに限る。すなわち、

$$\forall x \forall y (Rxy \Leftrightarrow Syx)$$

が成り立つとき、かつそのときに限って、関係RとSは逆関係である。例えば、関係「親」の逆関係は「子」であり、「子」の逆関係は「親」である。アリストテレスの場合は逆関係を、関係項相互の交換可能性として捉える。その際、〈主格—属格〉の対という言語表現上の構造が、交換という操作によっても保存されることが原則であるが、場合によっては変更されることも認めている。

ところで、「親と息子」「父と子」のように、この可逆性(交換可能性)が成り立たない場合もある。アリストテレスの挙げる例では「翼と鳥」である。「翼は鳥の翼である」(*τὸ πτερόν ὄρνιθος*: 6b38-39) とは言えるが、「鳥は翼の鳥である」(*ὄρνις πτεροῦ*: 7a1) とは言えない。これは、二つの関係項が交換可能なもの同志の対応という、本来の対応になっていない(鳥以外にも翼を持つものがある)からである。つまり対応する関係項の与え方が本来的な仕方では(*οἰκείως*: 6b37) なされていないからである。そこで、「鳥」に対応する関係項としては「有翼のもの」(*τὸ πτερωτόν*) が与えられねばならない(7b2)。すると、「翼は有翼のものの翼である」と同時に「有翼のものは翼

において有翼である」として、可逆的となる(7a4-5)。可逆性(交換可能性)を回復させるために、新しい名前が必要な場合もある。「舵は舟の舵である」とは言えるが、舵と舟の関係は可逆的ではない。なぜなら、舵のない舟もあるからである。そのとき、「舟」に対して「舵付きのもの」という名前を新たに造語することで交換可能としうる(7a11-15)。同様に、「頭」と「動物」の関係も可逆的でないから、「有頭のもの」(*τὸ κεφαλῶτόν*)という名前の造語によって本来の可逆的關係を与えることができる。

#### (4) 同時性

「關係的なものは、本性上同時的であるように思われる」(*δοκεῖ δὲ τὰ πρὸς τι ἅμα τῇ φύσει εἶναι* : 7b15)とアリストテレスは述べる。2倍のものがあるから半分のものがあり、半分のものがあるから2倍のものがある。奴隷があれば主人があり、主人があれば奴隷がある。これらの関係項は消滅という観点からも同時的である。つまり、一方が消滅すれば他方も同時に消滅する、という意味で同時的である。2倍のものがなければ半分のものもなく、半分のものがなければ2倍のものもない。しかし、關係的なもののすべてが本性上同時的であるとは思えない、とアリストテレスは言う(7b22-23)。本性上同時的であるわけではない關係的なものの例として、「知識」と「知られうるもの」とが挙げられる。「なぜなら、知られうるものは知識より先に存在していると思われるからである。」(*τὸ γὰρ ἐπιστητὸν τῆς ἐπιστήμης πρότερον ἂν δόξειεν εἶναι* : 7b23-24) 知られうるものが消滅すると知識を滅ぼすが、知識は消滅しても知られうるものを滅ぼしはしない(7b27-29)。アリストテレスは、知識という形では未だ知られていない事物が無数にあると考える。例えば、円の求積法、すなわち、任意の円の面積と同じ面積の正方形を求める知識は未だ存在していないが、そのこと自体は知られうるものとしてある、とアリストテレスは考える(7b31-33)。

知識と知られうるものという対にあるのと同様の事情が、感覚と感覚されるものの間にもある(7b35)。感覚されるものは感覚より先にある。なぜなら、感覚されるものの消滅は感覚の消滅を伴うのに対して、感覚の消滅は感覚されるものの消滅を伴うことはないからである(7b36-38)。感覚は物体(*σῶμα*)に関わり動物の身体(*σῶμα*)においてあるが、身体は感覚されるものの一つである。従って、感覚されるもの(物体、熱さ、甘さ、苦さ等)が消滅すれば動物も消滅するし、感覚も消滅するのである。

#### (5) 難問と再定義

ところで、『範疇論』8a13以下で、やや唐突ながら、アリストテレスはいかなる実体も關係的なものに属することはないのか、という難問(*ἀπορία*)の検討に入る。このような問いを考慮する動機としては、「頭」や「手」が「何かの頭」「誰かの手」といった全体一部分關係を構成すると思われ、また「牛」「材木」が「誰かの牛」「誰かの材木」といった所有關係をなすと見えることであろう。これらはいわゆる「第二実体」であるが、第一実体が關係的なものに属さないことは明白である、

とアリストテレスは考える (8a16-17)。「なぜなら、或る (特定の) 人間が何か或ものの一ある (特定の) 人間とは語られないし、或る牛が何か或ものの一或る牛とも語られないからである」(*ὁ γὰρ τις ἄνθρωπος οὐ λέγεται τινός τις ἄνθρωπος, οἷδε ὁ τις βοῦς τινός τις βοῦς* : 8a16-18)。全体として見た第一実体、例えば「或る特定の人間」、「個人としての或る人間全体」が以上のように関係的なものではないとすると、部分としての第一実体、例えば「或る特定の人間」という全体に対する部分としての「或る手」「或る頭」も、同様に関係的ではない。なぜなら、「何か或ものの或る手」とか「何か或ものの或る頭」とは言えないからである (8a19, 20)。第一実体の場合は、「言語的」にもこのような言い方は許されない (許されるのは「何かの手」「何かの頭」という言い方である : 8a19, 20)<sup>(18)</sup>。第二実体の場合も大抵は関係的ではない。「何か或ものの人間」「何か或るものの牛」「何か或るものの材木」とは言わないからである (8a21-23)。牛は所有されている牛もあればそうでないものもあろう。所有されている牛の場合、その牛は「何か或るものの所有物である」(*τινὸς κτήμα* : 8a24) と言えばよい。しかし、身体の一部としての「手」「頭」の場合、全体一部分という関係 (と思われるもの) がこれらに対して、「何か或るものの」(*τινός*) という属格で示される対応物を要求するように思える。

この、第二実体のあるものは関係的なものではないか、という難問を解くために、アリストテレスは「関係」の定義を再検討する。『範疇論』7章の冒頭では、こう定義されていた：「関係的なものと言われるのは、まさに何であるかという点で、それ自身〈他のものの〉と語られるか、または何か別の仕方、〈他のものに対して〉と語られるような、そのようなものである」(*πρὸς τι δὲ τὰ τοιαῦτα λέγεται, ὅσα αἰντὰ ἄπερ ἐστὶν ἑτέρων εἶναι λέγεται ἢ ὅπως οὖν ἄλλως πρὸς ἕτερον* : 6a37-38)。この定義は言語表現の形態によって、関係のあり方に接近したものであった。ここでの〈他のものの〉は、対応する関係項が属格で現れる。すると、「何か或るものの頭」(*τινὸς κεφαλῇ* : 8a26-27) がこの定義に当てはまると思われ、そこから「頭」は関係的なものと結論したくなる。これを避けるためにアリストテレスは、次のように定義し直す：「関係的なものとは、[その何で]あるということが、それが何かに対してなんらかの関係にあることと同じであるような、ものである」(*ἔστι τὰ πρὸς τι οἷς τὸ εἶναι ταῖτόν ἐστι τῷ πρὸς τί πως ἔχειν* : 8a31-32) これによって、アリストテレスは彼の難問を解決したことになるのだろうか？アクリルはこの箇所の論点を以下のように整理している<sup>(19)</sup>。

- (a) アリストテレスによれば、第一の基準 (最初の定義) では頭や手は関係的なものとなるが、第二の基準 (新しい定義) ではそうはならない。
- (b) 第一の基準が、事物が何であると〈語られるか〉、何であると〈呼ばれるか〉に言及しているのに対して、第二の基準はそうはしていない。(伝統的には、*secundum dici* [陳述に基づいて] と *secundum esse* [本質に基づいて] として区別される。)

- (c) アリストテレスは、第二の基準によって関係的なものとされたものはすべて第一の基準を満たすと述べている (8a33-34)。
- (d) 第二の基準は、あるものAが関係づけられているものBを「確実に知る」という必然性をもたらすと言われるが (8a35-37)、この必然性が頭や手の場合に成り立たないという事実は、修正された基準によれば、それら [頭や手] が関係的なものではない、ということを示すものとみなされる (8b15-19)。

アクリルは、第一の定義と第二の定義の違いを明確にするのは(d)である、と言う。確かにその通りであろう。頭や手は何物かの (または誰かの) 身体の一部ではあるが、例えば、身体他の部分が隠されていても、手や頭であることは十分に知ることができよう。「誰の頭か」「誰の手か」を知らずとも、つまり、その「誰」を特定できなくとも、その身体部位がともかく何かの頭であり、何かの手であることは知ることができる。すなわち、第一の定義に含まれる基準では、Aは必ず何かBのRであるが、Aが何のRであるか (Bの正体) を知らなくとも、AがRであることを知ることができる。それに対して、第二の定義に含まれる基準では、AがRであることを知るのは、Aが何のRであることを知るときに限られる。しかし、この基準は強すぎる、とアクリルは言う。その理由は、文句なしに関係語である「半分」や「奴隷」がこの基準を満たさないからだ、という。97がある他の数の半分であることを、その数何であるかを知らずとも知ることができるし、カリアスが奴隷であることを、誰がカリアスの主人であるかを知らずとも知ることができるからだ、という<sup>(20)</sup>。

しかし、この点についてはアリストテレスを弁護する余地があるように思われる。97が〈ある数〉の半分であることを、その〈ある数〉が194であることを知らないでどのように知ることができるのだろうか? 「どんな数にもその2倍の数がある」( $\forall x \exists y (2 \cdot x = y)$ ) という一般法則から導くのだろうか? (しかし、その一般法則はどうして知るか?) おそらく、アリストテレスの意図は、97が他ならぬ194の半分であることによってしか、97が何かの半分であることも知り得ない、ということであろう。これは、関係の可逆性 (逆関係) についての議論からも推測できる。97が194の半分であるのは、194が97の2倍であるとき、かつそのときにかぎる。従って、194が97の2倍であることを知るとき、かつそのときにかぎり、97が194の半分であることを知るのである。97が何かの半分であることを、つまり97が関係的なものであると知るということの内には、対応する関係項の正体を知っていることを含むであろう。一般法則から知る、または類推によって (1は2の半分、2は4の半分、3は6の半分、…、従って97もある数の半分、という形で) 知ることが、仮にできるとしても、それは97が関係的なものとしてあることを知るという知り方とは別であろう。「奴隷」の場合も同様であろう。ある人間の、衣食住の状況や、労働時間や、許されている財産・権利・義務、そういったものから、彼の主人が不在でも、彼が奴隷であることを推測できるかもしれない。しかし、厳密には、それは彼が「奴隷的境遇」にあるということを知るだけではなからうか? 「主人と

奴隸」という関係的なものの一方の項を彼が担っていることを知るの、もう一方の項を知るときに限られる、と考えられる。アリストテレスの意図はそのようなものではなかったろうか。

### §3 性質

『範疇論』8章でアリストテレスは「性質」について論じる。「量」の場合とは異なり、ここではアリストテレスは、「性質そのもの」を表すために抽象名詞 *ποιότης* を用いる。「どのような？」を意味する疑問形容詞に由来する指示形容詞 (*ποῖον*) は、性質の述語づけ (性質づけ) のために残される。むしろ、今度の場合も、言語的なアプローチによって性質そのものの構造に迫ろうとする戦略が採用される。すなわち、「それに基づいてあるものがくどのようにと語られるもの」 (*καθ' ἣν ποιοί τινες λέγονται* : 8b25) が「性質」(*ποιότης*) である。しかし、一口に「性質」といってもさまざまな仕方でも語られる (*τῶν πλεοναχῶς λεγομένων* : 8b26) から、まず性質の種類を確定することから探究は始められる。アリストテレスは四つの種類の性質を区別している。順に検討していこう。

#### (1) 状態 [性状]・様態 [様相] および生得的能力・無能力

第一に挙げられる性質の種類は、状態 [性状] (*ἔξις*) と様態 [様相] (*διαθεσις*) である。「状態」は「所有」をも意味する語であり、長期に亘って持続し (*πολυχρόνιος*)、安定しており (*μόνιμος*) 容易には変化しない (*δυσκίνητος*) あり方 (性質) を指す。それに対して、「様態」は容易に変化し (*εἰκίνητος*) しかも直ちに变化する (*ταχὺ μεταβάλλοντες*) 性質である。アリストテレスによれば、知識や徳性は状態である。何かを学び知り、その事柄について安定した物の見方・捉え方を獲得した状態が知識であり、それが魂の持つある性質とみなされる。同様に、正義 (*δικαιοσύνη*) や節制 (*σωφροσύνη*) といった徳性 (*ἀρετή*) も、魂の長期に亘る安定した性質である。様態 [様相] の例は、熱 (*θερμότης*)、寒け [冷え] (*κατάψυξις*)、病気 (*νόσος*)、健康 (*ἰγίεια*) である。人はこのようなものに基づいて何らかの様態にあるのである (*διᾶκειται…πὼς κατὰ ταύτας ὁ ἄνθρωπος* : 8b37-38)。しかし、それらは容易に変化する。熱い様態から寒い様態へ変化するし、また病気が回復して健康になる。不治の病になったり (*ἀνίατος*) 習性 (ないし慢性) となつて (*πεφύσιωμένη*) 元にもどらない場合は、むしろ状態と呼ぶのがふさわしい (9a1-4)。こうして、まず最初に挙げられる性質の種類は状態と様態であり、これらの特徴が対照的なものとして扱われる。

ただこの場合、状態と様態を区別する二つの基準、すなわち①長時間の持続性と②変化しにくさが分離することがあるか否かについては、明確ではない<sup>(21)</sup>。この両者①、②をともに満たすのが状態であり、ともに満たさないのが様態である。では、①を満たすが②は満たさず、あるいは①は

満たさないが②は満たすといった場合についてはどうか。例えば、さほど頑健でない（つまり変化せず安定している訳ではない）人がたまたま健康を保って、それが長期間続いた場合はどうか。彼の健康はあやういバランスに基づくものであって、何かひどい流行病などにぶつかれば直ちに病気になる類のものであるが、幸運にもそのような事態に直面することをたまたま免れたという場合は、①は満たすが②は満たしていない例となろう。また、ある知識をマスターした人が突発的な事故ないし病気によって（例えば記憶喪失や言語障害といった形で）、突然にその知識を失う場合はどうか。彼の持つ学識は他人の追従を許さぬ堅固なものであったにも拘わらず（②をみたす）、突然中断された（①を満たさない）のである。このような中間的・過渡的な場合も確かに考えられる。その場合にアリストテレスがどのような処理をしたかは、一つの思考実験課題となろう。

アリストテレスが論じる第二の種類の性質は、ある生得的な能力・無能力である。例えば、「拳闘に適している」（*πυκτικός*）、「競争に向いている」（*δρομικός*）、「健康的である」（*ιγιεινός*）、「病気がちである」（*νοσώδης*）といったことは、生得的（生来の）能力または無能力（*δύναμις φυσική ἢ ἀδυναμία*：9a16）に基づいて語られる性質である。これらのことは（たまたま）ある様態にあることによって（*τῷ διακεισθαί πως*：9b16-17）語られるのではない。いま、たまたま健康な様態にある、または拳闘の試合にたまたま勝った、ということでは「健康的である」とか「拳闘に適している」とは語られない。何かを容易に為したり何も被らない（何も影響を受けない）という生得的能力を持っていることによって（*τῷ δύναμιν ἔχειν φυσικὴν τοῦ ποιῆσαι τι ῥαδίως ἢ μηδὲν πάσχειν*：9a18-19）語られるのである。学習によって何かの技能を身につける場合、その教育システムが完備したものであればほどほどの成果は誰にでも上がるだろう。技術にまで整備された技能取得の方法は、学び手の素質に無関係に教育効果・修得効果を与えてくれる。しかし、ここで言われる能力はそうではない。四苦八苦して身につけた拳闘家は、素質（才能）に恵まれ容易に拳闘技能を修得していく拳闘家とは違う。単に為すということと容易に為すということとは違う。ここで語られる「健康的な人」とは、たまたま微妙なバランスの上に立ってやっと健康を維持している人ではない。ちょっとやそっとの病原にもびくともしない、生まれつきの頑健な体力の持ち主のことをいうのである。「病気がちの人」とは、流行病にかかって現在たまたま病気である人のことではなく、もともと（病原体の接近などの）外からの影響に弱い、影響を克服する能力を欠いている（＝無能力）人のことである。ある技能の修得が生来の素質にどの程度まで依存するかは、どれくらい明確に語れるのか。おそらく微妙な問題があるが<sup>(22)</sup>、ここでアリストテレスが考えていることは、技能獲得の過程での容易さや、健康・病気といった身体の状態のあり方に基づく、相対的な区別であると思われる。（「硬さ」・「柔らかさ」もこのような能力の一つとみなしていることから、この区別はかなり概括的なものであろう。）

## (2) 受動的性質・受動態および形状・形態

性質の第三の種類は、受動的性質（παθητικὴ ποιότης）と（広義の）受動態（πάθος）である。受動的性質の例としては、甘さ（γλυκύτης）・辛さ〔または苦さ〕（πικρότης）・酸っぱさ（στρυφνότης）といった味覚の性質、熱さ（θερμότης）・冷たさ（ψυχρότης）の触覚の性質、白さ（λευκότης）・黒さ（μελανία）といった色である。これらのうち、味覚の性質と触覚の性質は、味覚（γεῦσις）と触覚（ἄφή）という両感覚においてある受動態を作り出す原因であるゆえに、受動的性質と呼ばれる。甘さを持つ蜜は、舌において「甘い」という受動態を作り出す。蜜が甘いのは本性的に甘いのであり、何かを受動して甘くなった訳ではない。本性上熱い火は、近づく物体を温め、熱くする。熱さを本性的に有するものは、それ自体が何かを受動して熱くなるのではない。むしろ、他のものを熱くする。他のものに「熱い」という受動態を作り出す。こうして、味や触の性質が受動的性質と呼ばれるのは、それらがある受動態を作り出す能動的原因であるからである。それに対して、色は受動の結果である。ここで考えられている色は顔の色（肌の色）である。赤ら顔の人の赤い皮膚の色、熱帯地方の黒い人の黒い皮膚の色は、いずれもある受動態の結果であって、これらの色が他のものに何か受動態を作り出すことはない。（白い布を赤い染料で染めると布は赤くなるから、色も受動の原因となると考えられるが、ここでは色一般ではなくもっぱら肌の色だけをアリストテレスは念頭に置いている。）

広い意味では短期間の一時的受動態も性質とみられるが、「どのように？」という問いの答えとしての「性質」という観点からは、一時的な受動態は受動的性質とは区別される。例えば、恥ずかしい思いをさせられて一時的に顔を赤らめるとき、確かにその人の顔の色は赤くなっているが、それによってその人を「赤ら顔の人」と呼ぶことはできない。また、脅迫等によって恐怖を感じて一時的に真っ青になるとき、そのひとは確かに青白い顔の色をしているが、それによってその人を「青白い顔の人」と呼ぶことはできない。アリストテレスが考える「受動的性質」は、基本的には恒常的な性格のものである。もちろん、熱帯地方に長く住んでいたため皮膚が黒くなり、それが一生の間持続するというような場合は、受動的性質となる。「どのように？」という問いが、現在という時間に限られず、ある程度永続的な状況でのあり方を問うものと理解すれば、一時の受動による受動態は性質とは言いがたい。ここでもアリストテレスは、問いの形式の中に解答の仕方を予め設定した形で考えている。

さて、第四の種類は、三角形・四角形といった形状（σχῆμα）や形態（μορφή），さらに線や面の持つ真直さ（εὐθύτης）や曲がり（καμπυλότης）である。いわゆる幾何学的性質に相当するものである。幾何学的な形は確かに性質と言えようが、物体の表面部分のもつ形状、例えば木目の粗さ（τὸ μανόον），木目の細かさ（τὸ πικνόον），ざらざらしていること（τὸ τραχύ），滑らかさ（τὸ λείον）は性質ではなくむしろ位置（θεσις）に分類される、とアリストテレスは考えている（10

a16-24)。というのは、物体の部分が接近しているか隔たっているかで木目の粗さと細かきの違いが生じ、部分が凹凸なく一直線上に整列しているか否かで滑らかさとざらざらの違いが生じるからである、という。

以上、四つの性質の種類をアリストテレスは区別する。これは最終的・決定的な区分というより差し当たっての作業成果である。これ以外の分類の仕方、これ以外の性質のあり方があるかもしれない、とアリストテレス自身断った上で (10a25)、性質の基本的な部分はこれで押さえたのみなし (10a25)、以後、性質の全般的な特徴を論じる。

### (3) 性質づけと反対性と程度の差

さて、ある事物について、それが「どのようにあるか？」という問いに対して、その事物の性質が答えられる。しかし、その場合、性質そのものの名が直接その事物の名に述語づけられる訳ではない。むしろ、述語づけ、性質づけにおいては派生的に (*παρωνύμως*) 語られる。性質が述語づけられる場合、述語づけという言語的形式の観点から、アリストテレスは「性質づけ」(*ποιόν*) と呼ぶ。カリアスが「どのようにあるか？」と問われて、「彼は色白である (*λευκός*)」と語られ、「彼は白さである」とは語られない。もちろん、ここで白さ (*λευκότης*) が性質そのものとしてあって、これに基づいて述語づけ・性質づけが派生的になされる。大抵の性質づけはこの方式でなされる。例えば、文法術 (*γραμματική*) から文法家 (*ὁ γραμματικός*) が派生し、正義 (*δικαιοσύνη*) から正しい人 (*ὁ δίκαιος*) が派生する。

しかし、いくつかの場合には、このような派生的な性質づけはなされず、別な仕方で性質そのものに由来する性質づけがなされる。一つは、性質そのものに名前がない場合である。例えば、生得的な拳闘能力や格闘能力にはそれらの能力に対応する固有な名前がない。しかし、それらの技術・知識には名前があって、それら (拳闘術 *πυκτική*, 格闘術 *παλαιστική*) に由来して、拳闘家 (*ὁ πυκτικός*)・格闘家 (*ὁ παλαιστικός*) が語られる。もう一つの場合には、性質そのものには名前があっても、派生的にではなく全く別な言葉で性質づけられる。例えば、徳性 (*ἀρετή*) に基づいて立派な人 (*ὁ σπουδαῖος*) と語る場合である。

ところで、性質には反対性がある。例えば、正義と不正、白さと黒さは互いに反対である。これに伴って、二つの反対の性質に基づく性質づけにも反対性があることになる。すなわち、正しいもの (*τὸ δίκαιον*) と不正なもの (*τὸ ἄδικον*)、白いもの (*τὸ λευκόν*) と黒いもの (*τὸ μέλαν*) は互いに反対である。しかし、すべての性質づけが反対性を持つ訳ではない。炎の色 [炎紅] (*τὸ πύρρουν*) や黄色 (*τὸ ὠχρόν*) には反対性はない。また、反対のものの一方が性質ならば他方も性質である。(この原則はあらゆるカテゴリーに当てはまる、とアリストテレスは考えているようである (10b18-19)。つまり、AとBが反対であると言われるとき、これらには両者が属する共通なカテゴリーが存在する。)



さらに、程度の差についても、大部分の性質づけは程度の差を受け入れるが、そうでないものもある。一方が他方より白いとか、白さが増しているといったことが語られることから、明らかに白さは程度の差を受け入れる。しかし、正義そのもの、健康そのものに程度の差があるかは論争の余地があろう、という。性質そのものとしての正義や健康には、多い・少ないということはないのではないかと考えられるからである。だが、正義をより少なく持つとか健康が増進しつつある、という語り方はできるから、少なくとも性質そのものに基づく性質づけにおいては、正義や健康にも程度の差（多い・少ない）が語られる。程度の差が全然問題にならないのは、図形の性質（形状）である。三角形の定義を受け入れるものは三角形以外のものではなく、四角形の定義を受け入れるものは四角形以外のものではない。従って、三角形が四角形や他の三角形より一層三角形であるということはない。

#### (4) 類似・非類似と予想される疑問・批判

量に固有な特徴が等・不等であったのに対して、性質に固有な特徴は「似ている（類似 *ὁμοιον*）」とか「似ていない（非類似 *ἀνόμοιον*）」とかが語られるということである、とアリストテレスは言う（11a15-19）。ある事物が他の事物に似ているか否かが語られるのは、性質に基づく以外にはない。これは、量と違い、性質が程度の差を受け入れる場合が多いことと密接に関連する。三尺と四尺は端的に不等であり、似ていないと語ることに意味がない。連続的な程度の差（半ば三尺で半ば四尺というような量）を三尺と四尺の間に考えることはできないからである。それに対して、白さと青白さ（半ば青く半ば白いこと）には類似・非類似の連続的な度合いが考えられる。いずれも白さを共有しているかぎり両者は類似しているものであり、また一方は青さを欠き他方は所有している点で両者は類似していない。

8章の最後のパラグラフで、アリストテレスは予想される疑問または批判に答えようとしている。その疑問とは、性質を論じるとしながら状態（*ἔξις*）や様態（*διάθεσις*）のような関係を論じているではないか、という疑問である。例えば、状態の例として挙げられた知識は、「何かの知識」と語られる（*τινὸς ἐπιστήμη λέγεται* : 11a25-26）かぎり、関係であるからだ、というわけである。確かにそうだ、とアリストテレスは認める。しかし、類（*γένος*）としての知識は確かに関係であるにしても、個別的な知識（例えば文法的知識、音楽的知識）はそうではない。なぜなら、「文法的知識は何かの（例えば文法の）文法的知識である」とか「音楽的知識は何かの（例えば音楽の）音楽的知識である」とは語れないからである。もちろん、「文法的知識は何かの知識である」とか「音楽的知識は何かの知識である」とは語りうる。従って、個別的知識は関係ではない。そして、性質というもの、「どのようにあるか？」という問いの答えは、この個別的知識に基づいて語られるのである（*λεγόμεθα δὲ ποιοὶ ταῖς καθ' ἑκάστα* : 11a32-33）。「なぜなら、個別的なある知識を持つことによって知者である（知識を持つ人である）とわれわれは語られるからである（*ἐπιστήμονες γὰρ*

λεγόμεθα τῷ ἔχειν τῶν καθ' ἑκάστα ἐπιστημῶν τινά : 11a33-34)。」

以上の、疑問の提示とそれに対する解答は、一見問題を氷解させたように見えながら、かえって未解決の問題を掘り起こしてしまったという印象を与える。まず、状態としての知識が、ただ「何かの知識」と語られるからといって関係であるといえるのかどうか。「何かの知識」というときの知識は類であるとみなされているが、そのときの「何か」は類を種に分割する種差の役を担うものと解される。しかし、類と種差はどのような意味で関係であるといえるのか。定義を構成するというある機能を担い合うという意味では関係といえようが、述語づけの基礎になるカテゴリーの一つとしての関係とみなせるのかどうか。仮に類としての知識が関係だとすると、関係である類がそうではない種を持つことができることの統一的な説明が要求されよう。しかし、『範疇論』においてはそれ以上の論及はない<sup>(23)</sup>。

\*

\*

\*

アリストテレスの実体以外のカテゴリーは、彼が採用している言語的なアプローチのゆえに、単に言語的構造に基礎をおいた世界の見方の枠組を構成しているにすぎないように見えるが、決してそれに収まり切れるものでない。むしろ、その枠組は、れわれが現に経験的する事実と自然世界の観察による照合や確認を常に含み、それらによる訂正を常に受け入れる余地を残した、開かれた枠組であった。だが見方を変えれば、そこには曖昧さが残り、徹底性に欠ける面がある、ということでもある。例えば、関係ということ一つを取っても、その定義は余りに漠然としている。属格で表される「何かの」や「何かに対して」という前置詞句だけでは、関係か否かの判定基準とはなりえないという感を抱かせる。むしろ、形式的単純化を徹底させることによって、このような欠点は取り除けるともいえる。(例えば、現代論理学では述語づけが要求する主語の数によって、単に形式的に性質と関係を分けるだけである。)しかし他方で、「父親と子」ではなく「親と子」が本来の関係項を構成すること(と同等のこと)の指摘などに見られるように、アリストテレスの観察はきわめて正確でもある。さらに、性質の細かい分類に見られるように、彼が提出する事例はきわめて多岐に亙る。これはおそらく、言語構造を考察の手掛かりとするという方法論以外に、動物研究をはじめとする自然世界の観察からの膨大な知識・情報の蓄積が、アリストテレスに別角度からの照射という生産的方法論を提供したからであろう。無論アリストテレスも、われわれが二十世紀の先入見から自由ではありえないのと同様に、多くのギリシア的先入見(例えば円運動の偏愛など)から免れていた訳ではない。今日なおわれわれがアリストテレスに学ぶところがあるとすれば、汲めども尽きぬ旺盛な探究心と、多くの知識源に裏づけられた多角的な視点の提示という彼の方法論であろう。

## 註

- (1) 拙論「述語づけと実体—アリストテレス『<sup>カテゴリー</sup>範疇論』1—5章研究—」鳥取大学教養部紀要第26巻（1992）1—18頁参照。今回もアリストテレスの原典テキストとしては、OCT (Oxford Classical Texts) 中の L. Minio-Paluello, *Aristotelis Categoriae et Liber de Interpretatione*, Oxford 1949を用い、引用もこれによって行う（本文中の引用は断らないかぎり、すべて『範疇論』からのものである。）また、翻訳としては今回も、松永雄二訳（世界古典文学全集16『アリストテレス』筑摩書房、昭和41年）に主として従い、アクリルの英訳（註(2)参照）と山本光雄訳（アリストテレス全集1『カテゴリー論』岩波書店、昭和46年）を適宜参照するが、一部字句を変更することがある。また、『形而上学』に言及することがあるが、これのテキストも OCT 中の一冊である、W. Jaeger, *Aristotelis Metaphysica*, Oxford 1957を用いる。
- (2) J.L. Ackrill, *Aristotle's Categories and De Interpretatione*, English translation with notes and glossary, Oxford 1963, p. 91参照。
- (3) Ackrill, op. cit., p. 91.
- (4) 『形而上学』（以下 Meta. と略記する）Δ 巻13章、1020a 13-14では“…πληθος μὲν τὸ πεπερασμένον ἀριθμὸς μῆκος δὲ γραμμῇ…”（限られた多さは数であり、限られた長さは線である）と言われる。
- (5) Ackrill, op. cit., p. 92.
- (6) “β’. Γραμμῇ δὲ μῆκος ἀπλατέες.”, *Euclidis Elementa*, post I.L. Heiberg, ed. E.S. Stamatis, Teubner 1969, vol. 1, p. 1.
- (7) Meta. 1020a14, “…πλάτος δὲ [sc. τὸ πεπερασμένον] ἐπιφάνεια βάθος δὲ σῶμα.”
- (8) Meta. では「どれほどの」という問いへの答えという形ではなく、「それらの各部分が本性上ある一つのものであり、これなる或るものとしてある内的構成要素へと分割されるものが量と呼ばれる」と言われている（ποσὸν λέγεται τὸ διαυρετὸν εἰς ἐνπάρχοντα ὧν ἕκαστον ἐν τι καὶ τόδε τι πέφυκεν εἶναι : Meta. 1020a7-8）。
- (9) Ackrill, op. cit., p. 94.
- (10) Meta. Δ 巻13章で、アリストテレスは時間を付帶的・派生的量として扱っているが、これはそこでは位置の有無のテストを用いていないことと関連する、とアクリルは解釈している（Akrill, op. cit., p. 94）。
- (11) Ackrill, op. cit., p. 95.
- (12) Ackrill, op. cit., p. 95.
- (13) プラトン『国家』4巻436Bでの「矛盾律」の定式化：「同一のものが、その同一側面において、しかも同一のものとの関係において、同時に、相反することをしたりされたりすることはできないだろう」が想起される。
- (14) Ackrill, op. cit., p. 97.
- (15) Ackrill, op. cit., p. 97-98.
- (16) “ταὐτὰ μὲν γὰρ ὧν μία ἡ οἰσία, ὅμοια δ’ ὧν ἡ ποιότης μία, ἔσα δὲ ὧν τὸ ποσὸν ἔν [sc. λέγεται]” (Meta. 1021a11-12).
- (17) Ackrill, op. cit., p. 99.
- (18) Ackrill, op. cit., p. 101.
- (19) Ackrill, op. cit., p. 101 ff. アクリルによれば、第一の定義と新しい第二の定義の違いについて古代以来の論争がある。

(20) Ackrill, op. cit., p. 102.

(21) これはアクリルが提出している問題点である。Ackrill, op. cit., p. 104-5参照。

(22) 例えば、「拳闘に適した素質がある」といっても、全然拳闘の訓練・学習を受けないでもこの素質は自然に開花するものなのか（成長すればその素質を持つ子供は訓練なしでも拳闘がうまくなるのか）という問題がある（これはアクリルが指摘している：Ackrill, op. cit., p. 105-6）。ここでは「能力」（δύναμις）そのものについての議論はないが、『形而上学』Δ巻12章では五つほどに分類されている。(1)事物を運動させ変化させる（その事物とは異なる物に存するか、別のものとしてその事物に存する）原理，(2)（これと同様な）運動や変化を受動する原理，(3)巧みにまたは意図どおりに遂行する能力，(4)（これと同様な）受動の能力，(5)全く受動的でないか変化しないか，または容易には悪しき方向へ転化させられない状態（δύεξις）の五つである。ここで語られる「生得的能力」は(5)に近いものであろうか。

(23) これに関連して、定義における種差の使用に関するトposや関係的なものを吟味するためのトposが『トピカ』6巻で扱われているが、いまこれを追跡する余裕はない。今後の注目点の一つとしたい。